

平成 28 年 10 月 4 日
日本社会事業大学大学院
大原 さやか

星野 晴彦さま

レポート拝見いたしました。感想をお伝えいたしたいと思います。

- **当事者研究**は、全国で広がりを見せていて、「自分の助け方」などを研究しておられます。「問題を棚上げする」ことなど、いくつかポイントがあり、それを理解していないと、問題探しや犯人捜しになってしまうこともあります。また、実際の利用者さんでいたのですが、「僕は当事者研究をしたんです。」と仰っていて、何を研究したのかと尋ねると、答えに詰まってしまうことがありました。その利用者さんにとっては、「当事者研究をした」ことが大切であり、自分の身にどう役立ったかは、そんなに大切ではなかったのです。私が、当事者研究は難しいと思っているのは、そういった面であり、当事者研究の本質をどこまで理解しているのかということ、置き去りにしてはいないかと思っています。
- **保護室の問題**はとても難しく、私が入院していたところは、関東大震災を潜り抜けた建物であり、ほかの部屋はクリーム色なのに、保護室だけ鉄の壁でした。なので、一緒に入院していた友達が、保護室に来てくれた時に、ショックで倒れこんでしまいました。おそらく、「こんな場所にいないといけないんだ」という思いだったと推察しています。今、大学でティーチングアシスタントをしていますが、実習の終わった4年生が、「保護室はそんなに大変なところではなくて、これなら一人でいても楽だな。」という感想を話したので、私は思わず、「保護室はそんな甘いところじゃないです。」と、言ってしまいました。ただ、私の場合は、拘束が外れた後は、保護室は寝起きするだけの場となり、鍵もかかっていなかったなので、一人部屋として悠々使用できていたという恵まれた環境だったという面もあります。
- **相模原の事件**については、私も、初めて知的障害者更生施設に実習に行ったときのことを思い出しました。どう対応していいかわからず、施設長に「もっと自分から関わっていかなくては」と注意を受けました。固まってしまっていて、見ているだけが精いっぱいだったという記憶です。私は、ピアノが好きなので、童謡やCMソングを弾いて、コミュニケーションをはかっていきました。会話ができなくても、知っている音楽を聴くと、手をたたきリズムを取るなどしてくれました。支援員の方は、ちょっとした表情の変化で読み取り、介助をされていて、なかなかできることではないと思いました。今回の事件は、「何が大切なことなのか」ということを突き付けたようにも思いました。